第４回　「食べるということ」(2026.02.28 開催)

<概要をまとめる意義>
以下、今回の哲学カフェの内容について概要をまとめる。
これは議事録ではない。迷ったら何度もここに立ち返り、その内容を容赦なく批判し、議論しなおし、更なる”問い”の根源へ一歩でも近づくための手掛かりとしてほしい。

<食べるということ>
食べることについて考えていくと、この日常的な行為の背後には、具体的にも抽象的にも様々な視点が存在することが見えてくる。生物としての栄養補給という側面がある一方で、対人関係を取り持つ場としての会食もある。また、毎日の食物が必ずしも保証されなかった時代であれば、「飢え」そのものや、その救いとしての信仰対象とも結びついていた。一方で、飽食といわれる現代においては、大量の廃棄の問題や「あえて食べない」ことを大切にする健康法も現れてきた。
　今回の議論を俯瞰すると、大きくは「十分に食べ物がなかった時代」と「食べ物に困らなくなった時代」の二つに分けると整理しやすいように思われる。前者は、とにかく自分と家族を飢えから守るための、いわば動物的な食の時代である。人類史の大部分はこの段階に属し、日本においても戦後まで続いていたといえる。これに対し、食べ物に困らなくなってからの時代が戦後復興以降であることを考慮すると、飲食にまつわる各種の障害(水依存症,拒食症,過食症)は、長年苦しんできた飢えに対する生物なりの備えあるいは復讐の一表現であると考えられるのではないだろうか。
　以上を踏まえると、単なる栄養補給を超えた食の時代に生きる私たちは、物質としての食べ物と同じくらい「意味」や「記号」を食べているともいえる。例えば、定食屋でナイター中継を見ながら日替定食を食べる時、そこには「日常」という意味がある。一方で、高級フレンチで冷製スープをすする時そこには「非日常」という意味があるだろう。つまり私たちは食物そのものだけでなく、それに対する「意味」をも同時に食べているのである。

<“食べる”を読み解くキーワード>
・食べるとは必ずしも食べ物だけを指すとは限らない(記号を食べる)
・環境問題と食文化の変容の可能性(サンマ獲れない→伊勢海老：宮城県の事例)
・空間を含んだ食の体験
・拒食と過食(食物がある前提での障害？)
・過剰な空間や演出によって、純粋な味の体験が邪魔されている可能性はないか？

これらのキーワードから、新たな”問い“へ変換した。

<新たな問い>
・親から子へ「食べさせる」ことへの執着と子から親への「(わざと)食べない、残す」ことでの反抗
**　→愛の象徴としての「食事」の提供とそれを拒むことで、個への尊厳と不干渉を求める子の葛藤**
・「意味」ばかりを食べる私たちはやがて「食べる」ことの純粋な喜びを見失ってしまうのか？
**　→富の象徴としての虚飾的な食事から、本来的な滋味深い食事の在り方への回帰傾向あり。**